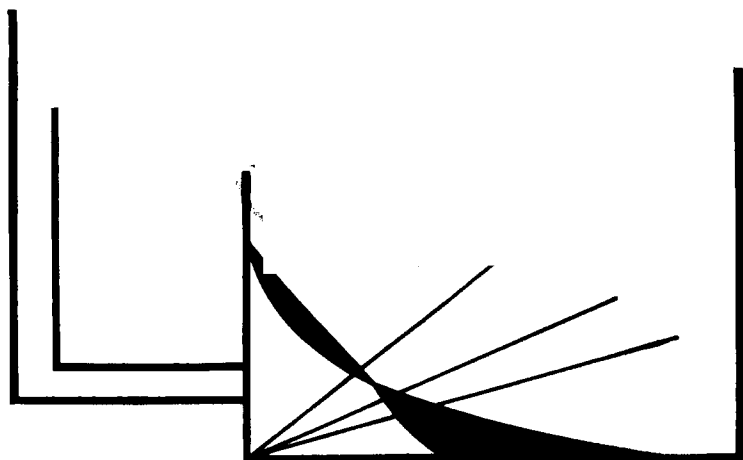


檀 一 雄 集

新選 現代日本文學全集

26



筑 摩 書 房 版

檀 一 雄 集

昭和三十五年十二月五日 発行

著 者 檀 だん 一 かず 雄 お

発行所 東京都千代田区神田小川町二ノ八
古 田 晁

印刷者 東京都青梅市根ヶ布三八五
山 田 一 雄

発行所 東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑 摩 書 房

〔電話〕東京元局例七六五一(代表)
振替 東京一六五七六八

整 版 株式会社 精 興 社
印 刷 株式会社 精 興 社
製 本 和田製本工業株式会社

檀 一雄集 目次

照る陽の庭	五	熱風	二四
最後の孤狸	二六	燃える草舟	二九
後生安楽	三三	ペンギン記	二九
佐久の夕映	三三	降つてきたドン・キホーテ	二五
埋葬者	三三	小人閑居	二五
元帥	三三	死んでも喇叭	二五
敗北者	三三	帰去来	二六
淋しい人	三三	誕生	二六
白雲悠々	三三	光る道	二六
新カグヤ姫	三三	私の家に来た天女	二六

残りの太陽	二四	稲妻物語	三五
波打際	二五		
巷のイエス・キリスト	二六	檀一雄論	河上徹太郎 二六
小説太宰治(抄)	二六	解説	浅見 淵 二七
海の光	二七		

装幀 恩地孝四郎
 恩地邦郎

檀
一
雄
集

照る陽の庭

1

あの町のことでは、庭先に毎朝^{毎朝}夥しいボー
コーが啼いていたことを覚えてゐる。もう姿も
声もすつかり忘れて終つた。

ただ、ぼんやりと庭の小鳥どもの啼き声を聞
いていた、何というか、自分の心の状態だけを、
今でもはつきりと覚えてゐる。

寂寞。そんなものであつたかも知れない。若
し寂寞というのが、世界からの明確な離脱と
同時に、自分のいのちのありかを、いきいきと
嗅ぎとつてゐることだ、というのならば、或は、
私の心の状態は、その寂寞という奴に一番似て
いた、と言ひ得るかも知れない。

もう家郷のことを思うてはいなかつた。いづ
こにせよ、投げだされた地点で、自分の生命が
描く小さな弧線を、まぎれなく見つめてゆける
ような気持がしていた。私の生命が投げだされ
てゐる周辺に、とめどなく生起消滅する出来事
を、己のいのちの計量にかけて、ひつそりとは
かつてゆけるような気持がしていた。

私は、恵まれていた。私の身柄は、兵士でな

く、将校でなく、然し私の行先は、北、中、南
支^支のれ^れの地点に亘り、いかなる期間を過ごして
も、問うところではなかつた。

何が気に入つて、あの家に居つたわけでも
ない。

ただ、たどりついた夜のぼんやりとした月の
明るさと、目覚めた時の樹々の繁みが幸い私の
宿舎の窓の視界を恰好に遮断していたことと、
その樹々の枝々に啼き交わしていた鳴禽類の夥
しい群とを、見慣れぬままに、却つて、何か親
しいものに思ひこんで終つたのであつたらう。

私は何となく、あのテラスに続く一部屋に居
ついて終つて、動かなかつた。旅に馴れ、旅を
物憂く感じていたのか？

いや、そうではない。旅に揉まれはてて、何
処にでも、自分の身と心を入れるだけの、過不
足のないたのしみだけを感じていたわけだ。

私は兵隊が油皿の明りを便りに案内してくれ
たその部屋の榻の上にドサリと仰向けに寝そべ
つて、しばらく眼を細めながら月の光りをたし
かめていたが、そのまま、翌朝迄眠つていた。

例の小鳥共の、喧しい啼き声だつた。こんな
ところに眠つていたのか、と私は自分をいぶか
りながら、それでも、とめどなく快活で、朝陽
のなかに、白壁の汚染の度合いや、天井板の組
み方などを、静かに点検してみるのである。

家具調度の類は一切運び去られてゐるようだ
つた。昨夜身を横たえていた寝台は木製の中国
式榻で、後から持ちこまれたふうである。胡桃

の床は軍靴の鋏で歩くから、その塗料が通行の
形に剝けている。

が、ただ一点、おそらくJ・ミレーの複製だと
思われる、オフエリヤの水死の絵が懸けられて
いるのは、誠に奇異な気持を抱かせるものでは
ある。オフエリヤは仰向けになり、頭を下流にし
て流れている。水面に浮ぶでもなく、さりとして
沈むでもなく、手にしたイラクサ・キンポウゲ
の花をすれすれに水が蔽うて純白の長い衣裳が
波の形に開いた姿のまま流れている。小川のほ
とりは春の野の花盛りのよう、柳か楡のよ
うな樹の林が、しだれている。

こんな絵の原色版が、懸けられたまま放棄さ
れてゐるのは、オフエリヤの色気が足りないの
だらう。それとも、これを奪つて私物にするの
が、不吉なのか？

どうでも良かつた。私はその絵を見て、それ
から窓を開き、小鳥共の鳴き交わしてゐる、辺
りの樹立の深さをのぞき見て、急に空腹を感じ、
ドアを抜けてテラスの方に廻つてみた。

昨夜、案内してくれた兵士だらう、ポソリと
私の側によつてきて、

「飯上げは、鐘を鳴らしますから、この道をま
つすぐ、煙突のある煉瓦小屋迄来て下さい。距
離は、四〇〇です」

「はあ、有難う」

と私は礼をした。が、何か言い足りぬともい
うふうに、その下ぶくれの、血色の悪い眼鏡の
兵隊は、立ち去りかねるようだつたから、

「ここ、客多いの?」

「はあ? 客? ああ、宿泊の将校ですか? ありません。近く閉鎖になる筈です」

それでは閉鎖迄は見ようか、と私の気持は動くのである。

「ついこないだ迄、この町にS軍の司令部がありましたから、大変でしたが、今は飛行隊の方が時々二三人とまるぐらいです。いつでも、がらあきです」

私は、背いて北叟ペイト笑えんだ。

英国人の住宅か何かだろう。その一集団をゴソリと一まとめにして、各棟に宿泊出来る仕組みになつていようだ。蔓薔薇つばきばらがアーチにつくられて、すぐそこまで匂うている。が花の時期は過ぎていた。

「ああ」

と兵士は思い出したように私を見て、

「入浴されますか?」

「はあ、有難う」

「風呂は週二回ですが、今日は立つ日です。十時頃わきますよ」

「有難う」

と重ねて礼をする、その朴訥な兵隊は、繁みの方に帰つていつた。

相変らず喧しい鳥の声である。朝の陽が、そこから木立を洩れて斑らに降り、その光りと陰の中を小鳥共が右往左往して飛んでいた。

いわば、ここは戦場のシーズン・オフだつた。

あわただしげな部隊の通過があるわけがなく、その番号と号令が聞えてくるわけではなく、また、何よりも幸いなことには、髭をひねり上げた部隊長と、その勿体ぶつた取巻連中が宿泊するわけでもなく、全くがらあきのままだつた。

定刻に飯上げの合図の鐘が聞えてくるが、一丁近くも離れたその賄いの兵士の処までゆくのは億劫なことである。殊に飯盒を抱えていつて、僅かに粥の浮んだ塩湯を貰つてくる時の、渡す人と貰う人両側からおこる気づまりな気持は嫌だつた。

私はつい、前の前のS市で手離れた写真機のを金を持つていたから、五六丁離れた難民区迄出かけていつて、豆乳と、何と云うかネジ棒のようなメリケン粉の油揚げを買い、これを朝食代りに摂ることにきめていた。夕食も自分流に炊爨した。

幸い、家屋の裏に濁つてはいるが井戸があり、捲き取りのつるべに頑丈な木桶がつかつてある。燃料は枯枝が豊富にあつた。

一二度例の兵士が気づかわしげに見廻りに来たが、

「はあ。これでやつとるですか? 兵站の粥では腹がふくれんですからなあ」

と笑つていた。それではこの兵士達は一体どうしているのかと気の毒だつたが、さして羨しがる風情でもなく、ただ淡白に笑うばかりだから、聞くのは止した。兵士は却つて向うで安堵した

ように帰つていつた。

私は、時に口笛を吹いたり、オフエリヤの水死の絵の中から故意に淫猥な妄想を描いてみたりしながら、三四日が経つていつた。

小鳥の数は多いが、啼いている鳥の種類は大略二種のように染つている夕暮の中で心細げに鳴き立てるとある。

五日目の朝だつた。例の通り豆乳に砂糖を入れて固形燃料で沸き立たせて、ネジ棒をポリポリと噛りながら、鳥の声を聞いていると、前庭の繁みの中で、一人の兵隊が何かしきりな所作を繰り返かえしている。

水筒だ、と私はすぐ気がついた。私は少年の頃に野鳥を捕える経験があつてよく知つているが、これを中国の風土の小鳥共のために見るほどの勇氣はない。

然し何よりも、この兵隊の特異な顔立ちには驚いた。私の居場所からこの男の位置までは、まだかなりの距離があつて、表情はつぶさには判らないが、動作の一区劃から、一区劃に移る区節の都度、陰気な、異常な、嗜好のようなものがめらめらと燃え立つようである。それが木立の黒白斑らの光の下に動くから、幽鬼かなんぞのように感じられる。

やがて、水筒を掛け終つたのだろう。男はテラスの上のほつてきて、私の部屋の、窓の網戸のところをベツタリと身を寄せた。で左の半身は壁の方に凭れているから、右の半身だけが、

よく見える。

私は不愉快を感じた。初めにちよつと私の方を覗いたようだから、私に気附いていない筈はない。それとも網目を洩れる逆光で、あちらから私の方は見えないのか？ それにしても右半分の網戸は私の存在を証拠立てるのように、はつきりと開け放つていたのである。

長い旅を経ていると、闖入者が一番耐え難い。いつもこちらの側から感じ、眺める習慣を保つていないと、心身の衰耗が甚だしいわけなのだろう。自然の、保身の道である。

私は用心深くこの男の横顔を眺めやつた。不思議な耳である。先端が長くががつており、この男の思考より先ばしつて、鋭敏に、向きを變える。人間の虚弱な悪の側を絶えず嗅ぎとつてゐるふうだつた。

それにもかかわらず、私は真近から男の横顔の表情を見て、何とも言えない安堵をも感じたことを言つておこう。その安堵については、ちよつと名状することがむずかしい。

わかりやすく言つて終えば、汚れていないのだ。俗世の垢に汚れていない。清らかな悪というものが、果してこの世の中にあるだろうか？ 若しあるとすれば、こんな顔を持つているにちがいないと、そう思つた。

安堵は、直ちに、新しいもう一段の好奇心に移つていつた。

「おい」と窓越しに横柄に呼んでみる。が、聞えないふうだつた。

その時、男の耳が素速く波立つた。一足飛びに駆けだしてゆくのである。

窓を押し開いて、私ものぞき出した。小鳥が水筒に落ちたようだつた。

光りのある生命が、羽毛を散らばすようにキラメかせ一瞬、くるりと水の上に反転して、やがて男の手にバタバタと捕えられた。

「獲れたね。え？ 何という鳥だい？」

男は両手に小鳥を握つたまま、まぶしそうに私の方を見上げていたが、何と思つたのか、つかつかとテラスを廻つて私の部屋に入つて来た。

3

こんな男が、何らか軍隊の階級に属しているというのは不思議なことだつた。見れば曹長である。年の頃は二十七—八いや、もつと老けているのかも知れなかつた。

満洲中国と、軍隊を渡り歩いて、八年になると言つてゐる。

私が榻に腰をおろしている、その真向いの竹製椅子に坐つて、逸早く小鳥を右ポケットの中にしまいこんでゐる。

「何と言う鳥？ それは」

と私はようやく平静に返つて、言つた。

「ツンゴ（中国人？）はボーコーと言つてゐるね」

私はどんな鳥だつたらう、と手に取つて一見したかつたが、何事によらず、この男に懇願するのは嫌だつた。時々男のポケットが膨れたり

縮んだりして、奇妙な小鳥の啼き声がきこえてゐる。

けれども相手の方は、私の生活に関心を持つてゐるらしく、

「何を喰つています？ 兵站の汁？」

「ああ」

と私はあいまいに返事をしてこの男に一々生活をのぞかれたくなかつた。然し曹長は、喰べさしの私のネジ棒と豆乳の余りを、もう先程から見つめてゐるので、言葉通りには受け取らなかつたに相違ない。

「これ、やりますか？」

男は盃を飲む真似をして、ピクリと例の耳を聳立たせた。瞬間、素速い緊張のようなものが、この男の顔を掠めていつて、耳と眼の血管が赤く開放するふうである。

「ああ」

と私は、静かに肯いた。

「ありますよ。ビールなら」

「そう、四五本飲みたいな」

「二千弗。二千弗ありや、看迄持つてきましよう」

私は雑囊から二千五百弗取り出して、男に手渡した。男は素速くその紙幣を右ポケットに挿じ込もうとしたが、小鳥の急な羽搏きと、キョツキョツというような啼き声に気がつくくと、あわてて左ポケットを探つて、そいつを押し込んだ。もう立ち上つてゐるのである。

耳が例の通りいそがしげに波立つて、男はく

るりと一回転すると出ていったが、その恰好が、何となしに亡霊をでも追いかけるふうに滑稽に見えてきて、私はしばらく可笑しさが止らなかつた。

それでも、待つた。私は屢々立ち上り、屢々窓のところまで歩いていつて、曹長の消えていつた木立の辺りを透し見た。

ビールを待つている為ばかりでもないようだった。男への好奇心。いや、男へ繫つているにちがいない、雑多な人間の、弱い悪への好奇心。そんなものが静かに私の心の中に湧いてゆくうだった。

勿論、男は来なかつた。昼も、夜も来ない。私は自分の平生の心のテンポを探しながら、オフェリヤの額を眺めくらしした。例の通り、空が橙色に染まり、夕方啼く方の小鳥共が、頼りなげにその夕空の中に声を上げていた。

来たのは空襲である。月明りのなかに、ボツボツとあわただししい空襲警報が、警戒警報より先ばしつてきこえてきて、もう空の中にB25らしい爆音が、腹の底へふるえるように響いていた。

私はテラスの陰に一人で走り出したが、妙に心許なかつた。一日待ちつづけていたせいだろう。今にもあの男がやつてきてくれそうで、あの男がやつてきてくれれば、万事助かるようない気がする。それにしても昼の間に、空襲の際の納得のゆく隠れ場所を探して置かなかつたのは、迂闊だった。

飯上げの煉瓦の倉庫のところまで駆けだそうかと、度々思つた。それをこらえていたのは、あの男が、今にも来てくれそうだという、全く当らない幻想だった。

曳光弾のようだった。しばらく空の中がまぶしく照り上つて、それからすさまじい爆風が続いた。近い。木立の葉々が、白く葉裏を見せて、身もだえている。

小鳥共が不安げに啼き立てた。私はベツタリとテラスの窪みにへばりついて、月光に白くさらされる自分の体を恐怖した。

パツと火柱が立ち、落雷を四五本も振じり合わせたような強圧的な爆発音が続き、私は土砂をかぶつた。破片だろう。瓦の上をカラーンと走つて行く音が最後に聞えた。

何処とわからない。が、この周辺に相違なかつた。ウォーンウォーンと相交らずB25の爆音は唸つている。私は土砂を払いのける力もなく、テラスの窪みにへばりついた儘だった。何処か遠くで、兵隊達の罵りわめくような声がきこえている。

けれども爆弾の音はしばらく止んだ。無闇に喉が渴いた。舌の根がひきつる程である。私はよろよろとよろけおきて、ちよつとテラスの上まで歩いてみた。幸いであつた。身体に別条はないようである。すると、今の間に、豆乳の余り物でも、飲んでおこうか。

然し恐怖が、時の経つにつれてかえつて増大していつた。歯の根が合つていないのである。

カチカチと上下に触れ合つた。

それでも手摺につかまりながら、意志だけで体をひきずつて、自分の部屋に帰つてみた。ガラス戸が破れて、粉微塵に散乱している。肝腎の豆乳はコップが倒れて、流れ出していた。水筒をゆすつてみるが、生憎と一滴もない。

何故部屋なぞに帰つたらう。井戸が裏手にあつたではないか、と思つたが、もう引き返す勇気はなかつた。ベツタリと榻の上に、倒れこんだ。然し飛行機の爆音と一緒に又走りだす心算である。が、走れるか、走れないか？

眠るというのではなかつたが、神経の濫費の虚脱状態におちこんでいた。コクリ、コクリと喉仏の辺りだけが痙攣的に鳴つている。足音がした。テラスを素速く駆け上つている。

それから私の部屋をノックした。

「いますか？」

「ああ」

と私の声がひきつった。あの男である。ドアを引きあけて入つてきた。類い稀な安堵の気が、私の心の中に湧いていつた。

「どうして灯りをつけませんか？」

「空襲だろう？」

私はつとめて横柄に言つた。

「もう、済んでますよ。寝てたんですか？」

「ああ」

と私は恐怖心をこの男にかくしたくなつて、そう答えた。

そいつがいけなかつた。自分の弱点と恐怖心をかくしていたことが、其の夜一晚を全くこの男にあやつられるままの結果になつた。

それにしてもビールはうまかつた。いや、味は何もわからぬように興奮していたが、舌の根がうるおい、喉仏が柔かくゆるんでゆくようであれ程の清涼の心地は、もう生涯味わえないかも知れない。

飛行機の部品入れにでも使うのだから、ズック製の頑丈な鞆から、男は後々とビールをひき出して、ボンボンと威勢よく抜いていった。

勿論、男も飲んでゐる。罐詰から、指ごと中味の鮎をつまんでゆき、ビールを飲み乾す度に、またその指先をたんねんに舐めていた。

月の逆光を浴びているから、甚だ気楽である。人と飲み合つているというよりは、妖怪が酒肴を運んで、私に饗応してくれているふうだつた。時々ピクピクと例の耳が月光の中にそよいでいた。

「ビールは月明りに限るね」

実は、まだ空襲への恐怖と私の取り乱した表情を見られたくなかつたばかりに、灯りをつけさせなかつたのだが、酔いにつれて、次第に心のゆとりも湧いてでた。

「どうだろう。今の空襲は？ 何処かやられたかな？」

私はおそるおそる言つてみた。男はコップの

手を中空にちよつととめ、それからいぶかしそうに私の顔を見て、

「兵站の炊事場がふつ飛んだよ。お蔭で、あんたは明日から、朝の塩湯が飲めないね」

知らなかつたのか、とでも言いたげに、おそろしくぞんざいな口をきく。

「あの、煉瓦の？」

こつくりと、男は肯いた。私は動顯した。

「兵隊は？」

「ああ、ふつとんだよ」

「あの、眼鏡の兵隊？」

「死んだ。野郎、米をかすつてしこたま現なまを持つてました」

「まさか？」

と私はしきりに不憫な心地が湧いてでた。

「本当だよ。丁度、最後の金は俺が預かつていたから、よかつたが」

何を言つているのかわからない。

「ああ、あたしが世話をしてツンゴーに米をわけてやつていましたから」

敬語と暴言が、屈託のない乱雑さで交錯するようだつた。然し、何処か私に安堵しているのだらう。それとも私の中に何か犯罪のようなものでも仮想して、そこへつながつているとでも思うのか。

逆立てて、コトコトと音をさせていたが、

「無くなつたね。もう少し、やるでしよう？」

「ああ」と私は肯いた。

「じゃ出掛けましょう。廉いところがある」

この男の言葉のテンポに、否応なしの迫力があつた。私は金入れの雑囊を肩にして、ちよつと戸外の月光を眺めやつた。昂奮の後に注ぎこんだから、可笑しいくらいに体が揺れている。その私の小脇を抱えるようにして、男はテラスを斜めに歩いていつたが、立ち止り、挨拶もせず放尿を始めている。

やがて体をゆすぶつてまた歩きはじめると、

「でも、喧嘩しちや、いけないよ。剣呑な男がいるからね。うちの、飛行大尉だが」

そう言つて、酔いをたしかめでもするようになり、月光の中にじつと私の顔を透しみた。

5

道は下り坂だつた。凹凸のある石磴で舗装されている。月光がその不揃いな角々に、光つていた。私がよく買物に来た難民区より、更に右手の方に折れこんだところのようだつた。下り切つたところへ、ボツと大きな河が見えている。S江のようだつた。

「じゃ、ちよつと」

と言つて、男は露路の中に入りこんで終つたが、

まもなく、表の戸がコトリとあいた。男の手にひきずられたまま、暗い軒先から入つてゆく。

足許が何も見えないのである。一二段階段を上

つたり曲つたりした。

ランプであろう。灯りが見える。やがて、談笑の聲に混り合つて、大きい叱声聞きこえてきた。

扉を開ける。十五六歳になるであろうか。金の耳輪を懸けた少女が、ちらりと私達の方を流し眺めた。いかにも扁平な顔立だが、正面からは真丸で、愛くるしいところがある。光りのせいか莫迦に、その顔が白く見えた。煤けた壁が分厚いので、却つて部屋に入ると、落ち着くようである。談笑は全く別な部屋だった。

中央は祭壇だろう。香炉の左右に朱い見すほらしい対聯が二つかけてある。橙子が二つ三つ置かれた儘の土間だった。部屋の中に籠がある。「これ、いるか?」

男は握り拳をつくつて見せているが、話の大尉を言うのであろう。少女はコツクリと一つ肯いた。曹長の耳朶が神経質にふるえて、それから、今度はどうした加減か神妙に、例の鄭重な言葉の調子に交つていつた。

「ビールですか。それとも汾酒にしますかね?」

「僕はビール」

「花立は汾酒をいただきます」

花立というのか、とこの男の顔を改めてもう一度眺めなおすのである。少女が、ビールと汾酒を運んできた。きたないコップである。よく見ると、ビールの瓶には、一々軍用のレットテルが貼られている。どうせこの男達が流すのだら

う、と酔いにゆらめいている相手の男の額際の色、と酔い顔を見つめるのである。

「やあ、灰だ。砂をかぶつてはまずい、こりやあ、ひでえ」

と男は頓狂な声を上げて私の側によつてくると肩と毛髪をはたくのである。なるほどひどい土砂である。先程の空襲のあふりを喰つたままにちがいはなかつた。

「転つてましたな? 泥の中に。おい、チウチウ」

花立曹長は、何かそんな名で少女を呼んで、顔を拭う恰好をして見せた。少女が鏡と濡れ手拭をもつてきてくれるのである。

これはひどい。土砂をかぶつている段ではなかつた。顔半分が真っ黒に泥まみれているのである。その顔が、花模様を透しのある手鏡の中へいびつに醜悪に浮き上つていた。

私は少女の手から急いで穢い濡れタオルを受け取つて顔中をなでまわした。

その時である。パーンと扉を思い切り開け放つて、

「ハナタテ」

驚いてふりかえる私の眼の前に五尺八九寸もあるであろう、長身の飛行服を身に纏つた将校が入つてきた。酔いが怒気に発しているようだった。ランランと眼が燃えている。

「ハッ」

と花立曹長はまるで小悪魔が吹き飛ばすような恰好で、この大尉の方に走りよつた。一瞬ジロリとこの将校は私の顔を見据えたが、真中だけ土砂をぬぐつたままの間抜け顔だつたらう、軽蔑の表情がかくせなかつた。

花立曹長は咄嗟に汾酒をコップ一杯注いで大尉の前に差し出すのである。大尉は悪びれる色もなく、そのコップを受け取つて、まつすぐ流し込むようにキユーツと嘸みほした。

「おい、チウチウ来い。お前はよし、花立」

花立曹長はいずれにするかと迷うふうになつと中腰でふらついたが、又腰をおろした。半長靴で、どしどし土をふみながら、大尉は隣りの部屋に帰つていつた。チウチウが大尉の後に続くのである。

「何という大尉?」

「ああ、あれですか。ダイゴ大尉」

「どういう字?」

「醍醐味の醍醐」

ぼつんとそれだけ言つて花立曹長は不愉快そうに耳を隣室の方に聳立たせている。が、この小悪魔も圧倒されているにまちがいないようだった。花立曹長は汾酒をしきりにあおる。私もビールをあおるのである。

「なあに、威張つたつて童貞大尉に何が出来るか?」

「それで、年頃は、いくつぐらい?」

「二十五ですよ、五十三期の」

老婆が愛想笑いを泛しぼべながら入つてきた。竈に火を入れてゐる。花立曹長はその耳に一つ二つ嘯なげいた。大鍋に、豚の油がシューーンと長い尻上りの音を立てて、とけてゆく。

「なあに、どうせもうすぐ死ぬんでさあ。あの若僧も。するとね、あいつの手風琴で一杯飲めませうよ」

ちよつと口をゆがめてそう言つて笑つたが、その眼が却つて沈着に澄んでゆくのは驚いた。

「君は、一体、軍隊で何をしているの？」

「墓掘りでさあ——」

「墓掘り？」

「ええ、遺骨係り。戦死者の遺品整理曹長さ」

なるほどそんな仕事の分担も軍隊には必要なのであろう。

「あの大尉は？」

「あいつは飛行機乗りですよ。近く冥土入りでさあ。それ迄、あんたも見とくがいい」

炒肉片のようなものを老婆が焼き上げて持参した。肉のつなぎは、いやにどぎつく赤い菜だ。が、うまかつた。ビールの舌によく媚こびる。ランプの灯影の下に素漠とむなししいビールの琥珀の色である。

生死の交替というものが、また執拗に新しい疑問の形で、私を震撼する。この日頃、旅から旅に移つていつて、ようやくつなぎとめたようなおのれの生命も、この料理の肉片の中に、他愛なくまぎれはててしまひそうなむなしさだつ

た。

「時に、あんた。女は要りませんか？」

「女？」

と私はいぶかりながら、またがらりと慙いん懣えんな調子にかえつた花立曹長の顔を見つめると、

「チウチウでさあ」

「チウチウ？」

「さつきの女、ね、九九という名ですよ九九八十一、さ」

「淫売か？」

「冗談じゃねえ。初物はつものですよ。が必ず、聞くよ。私が、婆ばああに言やあね」

九九の金の耳輪がちよつと私の眼の中に揺れるようである。が、それをそぎ取つて、この曹

長の耳朶みみに穴をあけてつるしたら、どんなものだろう、と酔いの上の陰惨な幻覚が湧いてきた。

隣室から大尉の歌声が聞えてきた。九九の笑声が一しきりきこえてくる。

「醜みにく醜みにくの野郎、又はじめやがつた」

と、花立曹長の尖つた耳が鋭敏にそよぐのである。唄節がちがつている。歌謡のようには思えなかつた。祝詞かなんぞであろう、ぶるぶると部屋の壁に頼たのうのである。

「何、あれ？」

「なんだか知らないけど、こいつが過ぎると、いつもきまりもんでさあ」

曹長はそう言つて、コップを握りながら自分の

の汾酒ぶんしゅをぐつと乾した。

「馬鹿馬鹿しい。少し、ここに來てるからね」

今度は頭に渦を描いてみせている。

「然し、立派な将校じゃないか？」

と私は先程の威圧感が抜け切らないのである。威張つてゐるとばかりは思えなかつた。何か純潔な火柱を負うてゐるふうだつた。生の火柱か？ それとも、死の？ 私は摸索しようのないその魂に、ちよつと触れ合つて見たかつた。

「で、九九どうします？」

「さあ」

と私は表情だけの困惑をつくつて見せた。酔つてはいるが、あんな浅墓あはなな媚こをうだきとめることもない。

「三千だよ、あんた。話をつけるよ」

「だつて、君。醜みにく醜みにく大尉の思われ人じゃないか？」

「冗談じゃねえ。隊長殿はね、その点だけは猫ねこに小判せうげんさ」

何の洒落しやれか、よくわからなかつた。が、急に隊長殿に變つたところをみると、おそらく大尉の純潔を言うのだろう。すると突然私にはあの大尉の目前で、思いきり少女を侮辱してやろう、と言う思いがけない激情が湧きたつてくるのである。

「じゃ、頼む」

私はふるえながら、雑囊ざつふくの金をひき抜いて花立曹長の方に差し出した。

「ハナタテ」

隣室から醜みにく醜みにくの大声が響いてくる。

「ハッ」

と度肝を抜かれたふうにな曹長は直立したが、あわてて私の金をひつたくと、歩きながら内ポケットに納めるのである。が、また、ちよつと私のところまで後がえつてきて、耳許に、

「なあに、あんな若僧、今しばらくのサービスですよ。手風琴、ね。手風琴」

言い残して、

「ハツ、花立。すぐ参りませう」
とわめきながら駈けていつた。

6

しばらくシンと鎮まるふうである。おそらく私のことでも喋り合つてゐるのだろう。一人になると、私は無意味な佻しさを扱い兼ねた。自体何しにこんなところまで来たのであろう。ビールが、飲むはしから醒めてゆく。

老婆はふりむきもせず、又大鍋の中で、何かを炒つてゐる。表からつぎの当つたモンペのようなズボン。そのズボンの先の纏足につつかけた三角の靴が、ヨチヨチといそがしげに左右に動きつづけている。

私は不思議だつた。人間の各様の生感という奴が。おそらくこの纏足の姿あだつて、もう二十年とは生きるまい。いや、今年死ぬかも知れたもんでないものである。何処で生れて、一体何をしてゐたか。いや、いや、自分が生きてゐるということ、考えたことすらないだろう。ズボンが破れば、中からつぎを当てるのか。当てねばならない、ときまりきつたことのように

に。死ぬ時には、死なねばならないとも思ふのか。

すると、幸福という奴は何だ。生れなければよかつたか。結婚しなければよかつたか。日本兵隊が来なければよかつたか。そうして今日、日本兵の強要に、豚肉を大鍋で、ジュンジュンといっためねばならないのか。そこで纏足が、窓の前をいそがしげに、右し左しするというわけか。

私は、纏足につつかけたヨチヨチと歩むその三角の靴が、何かすべてと切り離された独立の生感に見えてくる。奇妙な、不可思議な、原因も結果もない、独立の運動に――。

「纏足の独立王国万歳」と、私は花立曹長の切酒をかきよせてぐつと乾し、声を挙げてみい程だつた。

隣室から醍醐大尉の歌声が洩れてきよく聞いてみる。何のことはない。木梨の太子が、軽太郎女に奸けて道後の湯に逃げ落ちる、道行の歌だろう。戦場に、古代の兄妹心平など持ちこんで、何になる。気取つてゐるのか。馬鹿馬鹿しい。が聞いてみると、歌ふしには例によつて上古の蒙宕な哀調がにおつてゐた。

小竹葉に うつやあられの たしだしに率寝てむのちは 人議ゆとも うるはしと真寝し真寝てば かりこもの みだればみだれ 真寝し真寝てば

声は壁にぶるぶると吸われながら断続する。私はつけるともなくその朗吟の後を、口の中で

追つてゐるのである。汾酒をもう一杯グツト喉の中に拗りこむ。

「よし、やつてやれ」と私は立ち上つた。

視界が波のように揺れてゐた。踏みたえて、扉を排す。

醍醐大尉の部屋迄歩いていつて、それからドンと扉を開いた。体が崩れているから、そのまま雪崩れこむのである。

「誰だ。止め」と大尉の威嚇の声がした。はげしく立ち上る。バーンと拳銃が火を放つて、私の後の壁の辺りに土崩れがした。

榻の上に、今まで眠つていたのであろう。花立曹長が、起き上つてきよろきよろ辺りを見廻した。九九は腰をおろしてゐる。その榻の枕元に、片膝を立てるようになっていたが、醍醐大尉の手許と、私の顔とを素速く見較べた。

その頬が咄嗟に、この世ならず美しく思われ

た。

「撃つぞ」

醍醐大尉はまた拳銃の手をさしのべる。が、委細構わなかつた。私はまつすぐ九九の足許までよろけていつた。足許に倒れるのである。倒れながら効果を狙つた。中世風にやつてみたかつた。

九文もあるまい、馬鹿にきやしやな縫い取りの靴だつた。そいつをはぎ取る。九九はもだえながら身をかがめたが、私は頭で押しやつて、

足の指先に接吻した。

全く幸いであつたといえるだろう。九九は靴下をはいていなかった。

私は今度は素速く九九を抱き上げて、榻の上に腰をおろした。この少女の四肢は、膝の上に宛ら蝶のように軽く、不安定な心地がした。が、勝利は確実に、私のものだった。

花立曹長は中腰になつて、気を嚙まれたように落着きがなかつた。醍醐大尉は黙している。化石に似たその面持ちに、然し、思い儼しか嫌忌の表情が去来した。

九九だけが、耳輪をゆすつて、きやあきやあと膝の中に笑いこけていた。

ようやく氣附いたとでも言うふうには、花立曹長は立つていつて、卓上の汾酒とコップを持つてきた。コップを九九に手渡しして、それに汾酒を注ぎこんでいる。九九は笑いながら、コップを私の口許にそつと寄せてくれるのである。

「貴様は何だ？」

醍醐大尉は静かに言つた。

「従軍の小説家らしいですよ」

と花立曹長が、代つて答えながら、醍醐大尉のコップに注いでいる。

「小説の種類探しか？ 戦場の中に余計なものを持ち込むな。生死の修羅場だぞ」

私は九九の小脇を抱きすくめて、大尉の声の調子をはかつていた。甘いが厳肅な響きもあるけれども、これが軍流の教訓調かと思うと、私は笑いだして、

「貴様こそ、紀記歌謡の絆け歌なぞ、余計なものを持ちこむな」

「なに——」

と言つたが、こたえたようだった。

「生死の場に、上代ぶりの装飾も何もあるものか。氣取りだぞ」

大尉の顔に途方もない絶望の表情が泛んでた。その苦液をしばらく整えようとしてもするふうには、汾酒をちよつと舐めていたが、

「よし、わかつた」

これはまた淡白に背いた。煙草を抜きとつて、しばらく口に啣えている。花立曹長がマッチをこすりながら寄ろうとすると、

「いや、よし」

醍醐大尉はライターをポケットから探し出して、自分で点火した。紫煙が、その体力の旺盛さを物語るように、口辺いつばいに渦を巻いて、拡がつてゆくのである。

しばらく誰も黙つている。が、大尉は屹つと立ち上ると、その眉宇の中には何か凄惨な決意のようなものが湧いてでた。私の方に正対して、

「俺は、帰る」

拳銃を革のケースに押し込んでどんどんと外へ出ていつた。

曹長は扉のところまで追うていつたが、扉がしまると一緒にくるりと後がえつた。愉しもうに耳がゆれ、例の清らかな悪の笑顔が頬の辺りに波立つた。

「帰りやがつた」

「大丈夫かね？」

私はちよつと気がかりに思われたので、こう

言つたが、

「何が？」

「大尉さ。危いぞ」

「どつちにせよ、間もなく死ぬ奴さ」

花立曹長はいかにも寛ろいだふうには、汾酒をゆつくりほしながら、そう答えた。

「実は、あの野郎、自分の妹を、くわえこんだ、というんです」

「何？」

「なあに、同じ腹の妹に手をつけたと、いう噂さあ」

「大尉から聞いたのか？」

私は九九の耳朶の辺りをそつと唇にふれながら、男の表情をたしかめる。が他愛なく酒に崩れはてた顔だった。大尉が居なくなつて、急に酔いが廻つたのだろう。聞くだけが、馬鹿馬鹿しいようなものだった。

「同期の矢鳥軍神が言うてましたぞ。飲んだ時でしたが、醍醐のこれは妹だつて」

花立はそう言いながら、小さく小指を出して

みせ、私と九九を見上げるのである。

見上げてみて、驚いたようだった。急に立ち上つて側に寄つてくるのである。今迄気がつか

なかつたとしても言うのだろうか。

「やあ、こいつはやられました。こりや、ひでえ。三千ドルは廉すぎますぜ。五千でなくつちやあ。五千」

私はわずらわしくなつて来た。九九を膝から除けて立ち上つた。宿舎に急ぎたいのである。思い立つと片時も、こんなところにいたくはない。

「いくらだ。これの勘定？」

曹長は隣の部屋に當つていつた。しばらく愚図つているようである。九九が白けた顔で立つていた。耳輪が細かく際限もなしに揺れている。何となしに私も咄嗟に荒々しく膚の淋しさを感じていつた。

曹長が帰つてきた。

「済んでるさあ」

気抜けしたような顔だつた。

「何が？」

「隊長殿が、済まして、ます」

二重取りでもよい筈だ。それでは、この男もやつぱり心の隅で、何処か醍醐大尉を尊敬しているな、と私は今更のようにいぶかしく曹長の顔を見つめるのである。

「帰りますか？」

「ああ、帰る」

「九九は？」

「またにしよう。が金はやるよ」

私は二千ドル、花立曹長の手に積み重ねた。

「あなたは、全体、何といわれます」

例の慇懃な調子である。

「何が？」

「官姓名ですよ」

「ああ、真野だ」

私はそう言つて送り出してくれる花立曹長の後から、戸外に出た。

「今夜は、花立、此処に残ります。いや、送りますよかな。宿舎迄」

迷惑だつた。一刻も早くこの男から逃れたい。

「いや、いい。道はよく覚えてる」

「月明りだからな。月齢十八点の五ですよ。じや、又」

酔いから、急にしびれがかつてきた足を、引摺り上げるようにして、私は坂路を登つていつた。

7

朝陽が枕許まで廻つてゐる。相交らず喧ましいボーコーの声だつた。気がついてみると二つ三つガラス窓が破れている。よく見れば、何処から入つたのか、壁面にも爆弾の破片の痕跡が匍つていた。それでも、体の節々が疼くようだから、仲々起き上れぬ。昨日から一変した生活の様態に、何か不安の焦燥がからみよつてくるようだつた。

オフエリヤの水死の額が、三十度はかり左の方にゆがんでいた。そいつを、いかにもなつかしい郷土のように、くりかえしくりかえし、眺めやるのである。

もう、大分、時が廻つてゐるようだ。思い切つて、ようやく起き上り、その額の傾斜を正してみた。が、鈍痛のように、疲労が五体へ寄つてゐる。仕方なく、また、がつくりと床の中に

入りこんで眠るのである。

「もーし。真野報道班員殿」

とたるんだ長い兵隊の音が聞えている。

「ああ、どうぞ」

と私は床についたまま、返辞をした。瘦せた兵隊が臆病そうに入つてきた。

「ああ、生きとられたですか？」

私は可笑しくなつて笑いはじめると、

「昨夜見えんので、あなたもふつとんだのだらうと言つておりました」

「有難う、少し節々が痛むから、寝たままです」

「何処か、やられましたか？」

「いや、ちがう。飲みすぎです。ところで、この辺り別条ないですか？」

「炊事場が、ふつとびました」

「じゃ、本当？」

と私は花立曹長の昨夜の言葉を思い出してふるえるのである。

「島田がやられちゃつて」

「ああ、あの眼鏡の？」

「ええ、よくこの部屋に來たでしよう。運が悪くつて」

「命の方は、大丈夫？」

「いや、お陀仏ですよ。朝迄、死体を燃やしました」

不吉である。そこらを歩くのは嫌だつた。私は起き上るまいと決心して、

「今日は終日寝ましようかな？」